



# 京都外国語大学 ラテンアメリカ研究所 紀要 2022

## 〈論文〉

「病」から誕生したアステカの太陽神  
—陰と陽を併せ持つ天使たち—

..... 嘉 幡 茂 1

異端審問と領主権をめぐるテスココ先住民貴族層の紛争

..... 小 林 致 広 23

A obra “Inocência” e a introdução da literatura brasileira na Era Meiji do Japão

..... 久保平 亮 45

感覚実践がマヤ系先住民の織物文化の連続性に与える影響

..... 大 倉 由布子 67

## 〈研究ノート〉

Rethinking Colonial Frontiers: Survivance and Residence on The Itza Maya

..... 白 鳥 祐 子 93

明治・大正期における草創期のラテンアメリカ文献

—横山源之助、永田稔、藤田敏郎のラテンアメリカ移民論—

..... 辻 豊 治 113

メキシコ近代建築の位相

—ルイス・バラガンの感情的建築思想と、  
機能主義および地域主義との比較を通じて—

..... 東 俊一郎 127

## 〈書評〉

アルトゥーロ・エスコバル著、北野収訳・解題

『開発との遭遇—第三世界の発明と解体』（新評論）

..... 中 沢 知 史 145

〈書 評〉

アルトゥーロ・エスコバル著、北野収訳・解題  
『開発との遭遇—第三世界の発明と解体』  
(新評論 2022年 538頁 原著 Arturo Escobar, *Encountering  
Development: The Making and Unmaking of the Third World*.  
Princeton University Press, Princeton, 2012[1995], 538pp.)

中 沢 知 史\*

「持続可能な開発目標」(Sustainable Development Goals・SDGs)という言葉が日本でも毎日のように見聞きするようになった。そこでは、地球上の全ての人々が取り組み、2030年までに達成すべきとされるさまざまな開発課題が述べられている。例えば、SDGs 第一の目標は「貧困をなくそう」であるが、問題にされるのは他国・他地域の貧困であり、コロナ禍における日本社会の女性の貧困といった身近な貧困ではない。人類共通の課題とされるものが、なぜ特定の地域・状況に偏って語られ、別のところでは不可視化されるのか。このたび、訳者が10年という長い年月をかけて翻訳に取り組み、400頁を超える本文に50頁にわたる訳者解題を付して上梓した『開発との遭遇』(原著1995年刊、増補版2012年)は、こうした違和感を言語化し相対化するうえで格好の手引きとなる書である。

本書の章立て<sup>1)</sup>は以下のとおりである。

- 第1章 序論—開発とモダニティの人類学
- 第2章 貧困の問題化—三つの世界と開発をめぐる物語
- 第3章 経済学と開発の空間—成長と資本をめぐる物語
- 第4章 権力の拡散—食料と飢えをめぐる物語
- 第5章 権力と可視性—小農民と女性と環境をめぐる物語
- 第6章 結論—ポスト開発の時代を構想する
- 第7章 二〇一二年版への追補

原著者アルトゥーロ・エスコバル (Arturo Escobar 1952～) はコロンビア出身の人類学者で、ポスト開発論の第一人者である。エスコバルの経歴は、<北>の巨人米国と<南>のコロンビアのあいだを往還する、移動するラテンアメリカの知的エリートのそれである。自国の大学卒業後、「国民食料栄養計画 (Plan Nacional de Alimentación y Nutrición・PAN)」(1975～1990年頃)に関与し、留学先の米国で「開発」への疑念を知的に昇華させ、本書のもとになる博士論文にまとめている。内在的な「開発」批判をつうじて、米国の大学で教鞭をとる白人男性という特権的地位を有する「近代西洋人」(1頁)たる自身を省察した書としても読める。

エスコバルが体系的に「開発」批判を成し遂げたことと、彼がコロンビア出身であることは偶

---

\* 立命館大学嘱託講師・京都外国語大学ラテンアメリカ研究所客員研究員

然ではない。コロンビアこそは、第二次世界大戦後の覇権国米国にとって、軍事的な側面を含め南米で最重要の同盟国であり、「開発」の実験場となってきた国である。「開発」はグローバルな統治権力と深く関わっており、中立的、無色透明ではありえない。むしろ、こうした認識は2022年現在では特に新しいものではない。しかし、本書が知的に興味深いのは——それゆえに、訳者も指摘するとおり、難解さを免れ得ないのであるが——、M. フーコーおよびフーコーに学んだポストコロニアル論者たちの議論を参照しつつ、「開発」を言説分析の手法で批判し、さらに「開発」言説全体を解体すること（52頁）まで射程に入れている点である。結論部（第6章）に掲げられるとおり、エスコバルが「開発」批判を通じて志向するのは「開発のためのオルタナティブ」ではなく「開発に対するオルタナティブ」なのである（370頁）。

第2章では、第二次世界大戦前後の状況が分析の俎上に載る。植民地帝国が解体するなか、米国を中心とするグローバルな統治権力は、独立したアジア・アフリカの国々から成る<第三世界>との関係を再定義する必要に迫られた。そこで発明されたのが「貧困」であり、克服すべきものとしての「低開発」の概念である。かかる「表象のレジーム」のもとに登場したのが、第3章で取り上げられる開発経済学であり、近代化理論である。戦後に誕生した開発経済学が「進歩」のための物質的繁栄を得る方途として、経済介入から通貨安定・構造調整政策、そして市場志向へと、様々な処方箋を「低開発」の<第三世界>に提示してきたことはよく知られている。エスコバルは、開発経済学がベースとする経済学を、ヨーロッパ史というごく特殊な文脈のなかで偶発的に培われてきた文化的構築物と捉える。そのうえで、普遍科学を装う開発経済学が、その実いかに特殊な経済の概念と実践を世界中に押し付けてきたか、膨大な文献を博搜しつつ描き出す。

第4章は、具体的な開発実践に関する「制度の民族誌」である。いまや巨大な官僚機構となった開発装置による実践が、人々の思考や日々の生活の条件にいかんにか作用するか（202頁）に焦点が当てられる。エスコバル自身が関わったコロンビアの「国民食料栄養計画（PAN）」を対象に、「プランニング」という官僚的文書実務——「良識」（コモンセンス）にもとづくレッテル貼りや、脱政治化を特徴とする——によって現実がいかんにか構築され、そして計画の対象となった人々の規律＝訓練化がもたらされたかが縦横に語られる。エスコバルが語る「開発実践の評価」は、読み手が開発実務経験を有する場合、少々耳に痛く響くとともに、「開発」の名のもと自分が実際には何をしているのか、目を開かされるような思いがするであろう。

第5章に入ると、エスコバルの「開発」言説批判はさらに鋭くなる。主たる批判の対象は世界銀行である。世界銀行は、「グローバル・エリートをもてなす経済的・文化的帝国主義の代理人」（295頁）として、「小規模農家」「ジェンダーと開発」「持続可能な開発」と、こんにち広く人口に膾炙している概念を次々に発明し、農民、女性、はては自然まで、地球上のありとあらゆるものを「資源」化し、一元的に資本の管理下に置こうとしてきた。世界銀行に代表されるこうした「普遍」を押し付けてくるヘゲモニー権力に対し、いち早く抵抗を始めたのが小規模生産者組織や第三世界フェミニズム、そして先住民族であったことも頷けよう。

必要なのは、「開発」という「表象のレジーム」によって押しつぶされる文化を肯定するための政治闘争であり、ローカル、リージョナル、ナショナル、グローバル、あらゆる次元で行われている搾取・支配に抵抗する闘いと連帯することである。この観点からエスコバルが第6章で強調するのがラテンアメリカの異種混濁性（ハイブリディティ）である。1980～90年代のラテンアメリカは、支配的な「開発」のナラティブでは、累積債務問題などを抱える「開発の失敗例」

そのものであった。他方で、同じ時期にラテンアメリカから注目すべき様々な草の根運動や知的刷新が起こったことも事実である（373頁）。ポスト開発の時代におけるオルタナティブを構想するには、異種混雑性を苗床とするこうした草の根運動の実践に寄り添いつつ、文化の差異を資本の要求（権力関係を捨象した単なる多様性肯定）に従属させることなく、いかに守り抜くかが鍵となろう。

原著初版刊行からおよそ30年経つが、本書の価値は損なわれてはいない。実際、初版発行後の1990年代後半以降にますます可視化されるようになった先住民やマイノリティ運動、アグロエコロジー運動などの意義は、まさに本書で展開されるポスト開発論の枠組みで捉えたとき、より明瞭になるであろう。2012年増補版に寄せた第7章では、「ブエン・ビビール」（善き生）や「自然の権利」思想などに刺激を受け、文化の擁護からプルリバース（多元世界）論へとさらなる理論的展開が披露されている。アマゾニアの森林伐採やアンデスの鉱業にみられる採掘主義（extractivism）、マヤ鉄道などの「開発」をめぐる揺れる今日のラテンアメリカを考えるうえで、本書は極めて大きな示唆を与えてくれる。

## 注

- 1) 本文とは別に原著者エスコバルと、エスコバルの同僚である東アジア研究者マーク・ドリスコルによる二つの日本語版序文（それぞれ2022年2月付、2018年12月付）が付されている。ドリスコルの序文は、『開発との遭遇』以降のエスコバルの理論的展開—ポスト・コロニアルからデコロニアル（脱植民地）へ、ポリティカル・エコロジーからポリティカル・オントロジー（政治的存在論）へ—について簡潔に解説してくれている。また、エスコバルも参加した「近代性／植民地性」研究グループ（Grupo Modernidad/Colonialidad）にも言及があり、短いながらラテンアメリカ発の脱植民地論についての見取り図を提示している点で有用である。





# BOLETÍN del

Instituto de Estudios Latinoamericanos  
de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto

Instituto de Estudos Latino-Americanos  
da Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto

## 2022

### < ARTÍCULOS >

- Dios "feo" de los aztecas: divinidad que oscila entre la oscuridad y la luz  
..... Shigeru KABATA 1
- La inquisición y la disputa por el señorío entre los nobles texcocanos en los  
años 1530-1540  
..... Munehiro KOBAYASHI 23
- A obra "Inocência" e a introdução da literatura brasileira na Era Meiji do Japão  
..... Ryo KUBOHIRA 45
- Continuidad de la cultura textil de los mayas y trabajo somático  
..... Yuko OKURA 67

### < ESTUDIOS PRELIMINARES >

- Rethinking Colonial Frontiers: Survivance and Residence on The Itza Maya  
..... Yuko SHIRATORI 93
- Publicaciones pioneras sobre Latinoamérica en los períodos Meiji y Taisho:  
publicaciones sobre la emigración latinoamericana por Gennosuke Yokoyama,  
Shigeshi Nagata y Toshiro Fujita  
..... Toyoharu TSUJI 113
- Phases of Mexican Modern Architecture: Through a Comparison of Luis  
Barragán's Emotional Architectural Philosophy with Functionalism and  
Regionalism  
..... Shunichiro HIGASHI 127

### < RESEÑA DE LIBROS >

- Encountering Development: The Making and Unmaking of the Third World,*  
por Arturo Escobar (Shu Kitano tr.)  
..... Tomofumi NAKAZAWA 145

Vol.  
**22**